2009年11月15日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙８章1～11節

説教題：無力な私たちを助ける方

１　解放された

（1）私は、だめクリスチャン

パウロは子どもの時から、ユダヤ教の教えを徹底的にたたき込まれ、エリート教育を受けました。そのパウロは、クリスチャン迫害のためにダマスコと呼ばれる町に向かっている途中のことでしたが、復活されたキリストに出会い、劇的な回心をしてキリスト者となります。それ以来彼は、今度はキリスト教を伝え広めるために生涯をささげてまいります。彼の書いた手紙のいくつかが新約聖書の中に納められました。ローマ人への手紙そのような手紙のひとつとなります。

前回、７章の後半を見ました。パウロは自分のことをこのように言っておりました。「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」

大げさに言っているのではありません。自分が感じたことをそのまま正直に書いているのです。あのパウロがこんなふうに悩んでいたのかと、少し意外な感じを持つかもしれません。あるいはこんなパウロに親近感を持つかもしれません。というのは、私たちも実は同じ事を悩んでいるからです。心では善いことをしたいと思っているけれど、口から出てくるのはとんでもないことばだったりします。そのことで人を傷つけてしまいまうこともある。あるときは、自分のやったことで人に迷惑をかけてしまったりもする。そんなことを繰り返していると、誰でも自分はだめなクリスチャンだと落ち込んでいきます。そして最後にはこう思うのです。「やっぱり私の罪は赦されはずがない。だから天国には入れない。」そんな結論を出して、悩んでいる方が結構多いのではないかと思います。

（2）「こういうわけで」

ではパウロはどのような結論を出したでしょうか。パウロも私たちと全く同じことを悩んでいましたが、彼が出した結論は私たちのとは全く違います。1節でこう言っています。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

「こういうわけで」とはどういう訳なのか。彼は７章４節でこう言っていました。「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対して死んでいるのです。」

日本では、生まれると出生届をして戸籍をつくる決まりになっています。戸籍がつくられると、その日から日本の法律に従う義務が発生します。でも、死んでしまえば法律は関係ありません。それと同じように、律法は生きている者にはきわめて大きな影響力をもっていて、あなたは罪人だと責め立ててきたのですが、死んでしまえば何の力もありません。

あなたがたは死んでしまったのだから、律法はあなたがたを罪に定めることは絶対にできない。それが「こういうわけで」の意味です。

（3）どのようにして

ではいったいどのようにして私たちは死んだことになったのでしょう。私たちはこのように生きていますので、もちろん実際に死んだわけではありません。もう少し正確に言えば、私たちは死んでしまったという扱いをされているということです。いつそんなことになったのか。それが３節です。「肉によって無力になったために、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

キリストは二つのことをして下さったと言っています。一つめは、キリストは罪深い肉と同じような形をとられて私たちの所に来られた。それには大きな意味があるということです。

神道の行事の中に「禊（みそ）ぎ」と呼ばれるものがあります。自分のからだに罪や汚れがあって、身を清めるために、冷たい水の中に入るのだそうです。神道でもからだの中に罪汚れがあると考えています。しかしその後の扱いは神道とキリスト教では全く違います。神道は、修行によってきよめられると考えます。しかしキリスト教はそうではありません。絶対にきよめることはできない。人間には不可能なことなのです。というのは、私たちは「肉によって無力になっている」と言われているからです。だから、神の御子が肉の形を取って下さって、私たちの代わりに肉において罪を処罰して下さる必要があった。

そのときに、私たちは死んだという扱いになったのです。死んだ扱いになったのだから、もう罪に定められることは絶対にない。これは十字架で一方的に行われたことですので、私たちには実感がありません。後から知らされたことです。役所に行って自分の戸籍を調べてみたら、いつの間にか戸籍が抹消されて死亡扱いになっていた。言わばそんな状態です。

では、私たちの戸籍はどうなったのでしょう。大丈夫です。私たちの名はきちんと天に記されておりますので、ぬかりがありません。

２　もし御霊が住んでおられるなら

（1）肉の支配から御霊の支配へ

それまでは私たちはこの肉のからだがすべてでした。肉のからだを満足させるために何でもしました。からだがあれが食べたいと要求すれば、それを満足させるためにお金と時間もいとわずに努力しました。私たちは肉が命じることに従わざるを得ないみじめな状態にありました。かつては罪と死の原理に縛り付けられていました。しかし今は違います。今はいのちの御霊の原理が私たちを解放したと言われています。私たちのうちには、御霊が住んでくださっているというのです。

（2）キリストのものである

キリスト教の教えの中にはいろいろと理解が難しいことがあります。聖霊ということもそのひとつではないでしょうか。どうしてわかりにくいのか。この方はかなり控えめな性格で、あまり表には出てこない。だからわかりにくくて当然とも言える。

歌舞伎とか文楽を見ていますと、舞台の上に演じている役者の他に黒衣と呼ばれる人が登場します。役者ではありませんが、役者を助ける働きをしています。黒衣がいなければ舞台が成り立ちません。でも黒衣は舞台に

はいないという暗黙の了解をしながら観客は見ています。

聖霊はあの黒衣に例えられるのではないかと私はいつも思います。存在は目立たないけれど、しかし重要な働きをしています。私たちは舞台で演じる役者です。聖霊は陰にあって私たちの歩みをいつも助けてくれている。どんなふうに助けてくれているのか、パウロは聖霊の働きについて二つのことを言っています。

一つは、もし御霊をもっているのであれば、その人はキリストのものである。逆に言えば、御霊があることがキリストに属していることの証明になる。パウロは別の所でこうも言っています。「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。」(エペソ1：13)

聖霊をいただいているかいないか。それは、天国に入れる保証書をいただいているかいないか、という大きな違いです。もしなかったらどうしよう！これは大いに気になります。このことは後で触れたいと思います。

（3）死ぬべきからだを生かしてくださる

そして聖霊の働きの二つめです。11節。「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」

日本語で「生かしてくださるのです」と読みますと、今すぐに生かしてくださるかのように考えてしまいます。原文を見ますとここは未来形が使われていいます。ですからこの箇所をもう少しかみ砕いて言い直せばこんなふうになります。「神は二千年前キリスト・イエスを墓からよみがえらせました。今、御霊をいただいている私たちは、あのイエス・キリストと全く同じように死からよみがえらせていただき、やがて永遠に生きる者となります。」

御霊をいただいているということは、天国に入れる保証書だと言いましが、もう一つ、将来において永遠のいのちをいただける保証書でもある。そいう大切な保証書ということになります。

さて問題は、では私たちのうちに本当に聖霊は住んでくださっているのかどうかということになります。

4　私はキリストのものなのだろうか？

皆さんは不安に思っていらっしゃるのではないですか。私は聖霊をいただいている確信がない。というのは聖書にこう書かれているからです。「肉に従う者は肉的なことをもっぱらに考えますが、御霊に従うものは御霊に属することをひたすらに考えます。」だめだ。私は肉的なことばかり考えている。御霊に属することなどほとんど考えていない。あるいはこうも書かれている。「肉にある者は神を喜ばせることができません。」やっぱりだめだ。私は神を悲しませることばかりをやっている。こんな私に御霊は住んでくださっているはずがない。私は天国に入れる保証書などない。永遠のいのちが与えられる保証書がない。私はキリストに属してはいないかもしれない。だんだん落ち込んでいきます。

では、あのパウロはどうだったのですか。最初にも言いましたように、パウロは「自分ではしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」そう告白し

ています。ということは、パウロも肉に従って肉的なことを考えていた。御霊に従って歩むことなどできなかったと言っている。それなのにパウロは自分のことをさておき、私たちに「御霊に従って歩め」と脅かしているのか。もちろんそんなはずはない。ではいったい何を言いたいのか。それを最後に見てまいります。

5　無力な私たち

（1）死ぬべきからだをまとっているのだからできなくて当然

ポイントは二つです。まず一つめは、パウロが何度も言っているように、私たちはこの弱いからだを身にまとっております。このからだのなかに罪が住みついているのですから、肉の思いに従ってしまうのは、あたりまえのことなんだということです。

最近、ある芸能人が麻薬を隠し持っていて、それを吸っていたということで大きな話題になりました。麻薬の恐ろしさは、一度麻薬を経験すると薬物依存症になってしまうことにあるそうです。専門的な治療をしなければ絶対に麻薬から手を切ることができない。「もう二度と手を出しません」と決心して止められるものではない。人間の意志でどうのこうのするレベルの話ではない。完全な病気なのです。

パウロがここで言っているのはこれにきわめて近い。からだの中には、罪という病気が潜んでいて、専門的に治療しないかぎり、絶対に治らない。ですから、私たちが肉に従ってしまうのは、信仰が弱いからだとか、自分の意志が弱いからだということでは決してない。自分を責める必要はありません。

（2）だから御霊が助けて下さる

神は、私たちに罪の治療ができないことをご存じなのです。肉に従って歩まざるを得ないあわれな者であることを知っておられます。だから神であるキリストは罪深い肉と同じ形で来られ、肉において罪を処罰されたのです。

それだけではない。私たちがこの弱いからだで気落ちすることがないようにと、神は私たちを励まそうと、そのために御霊を送ってくださり、私たちのうちに住んでくださっていると言われています。

そのことについて、9節に不思議な表現があります。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。」

私たちは確かにまだこの弱い肉を洋服を着るようにまとっております。しかし実は神の目からご覧になると、私たちは肉の中にいるのではなく、御霊という服を身につけているように見えるようなのです。キリストが肉において私たちの身代わりとなって罰を受けられたとき、そのようにしてくださいました。ですから神はこう言われるのです。

「あなたのからだは、もうすでに十字架でわたしのひとり子とともに死んでいます。死んでしまったのですから、わたしにはもう罪のからだのことは見えません。今あなたは、古いからだの代わりに御霊という服を身につけています。私の目には、御霊におおわれているあなたの姿が見えます。」

こう言われてもまだ不安でしょうか。「私は神の前に立つことができない汚れた者です。私はいつも肉的なことばかりを考えてしまいます。」こう思われた方は多かったはずです。

でもよく考えたら、不思議ではありませんか。どうして自分の汚れが見えたのですか。どうして自分はふさわしくない者だと思ったのですか。

理由はただ一つです。皆さんの中に御霊が住んでおられるから、自分がふさわしくないと思えたのです。そうしますと、さかさまなことを言うようですが、神の前に汚れたふさわしくないと自分だと思っている方こそは、完全に聖霊をいただいている。キリストのものとされている。永遠のいのちをいただいている。そのことを覚えていただきたいと思います。

イエスは言われました。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」(マタイ５：4)

罪と汚れるに悲しむ私たちを、神は聖霊をとおして慰めようとされます。その恵みを覚えつつ、またこの一週間を歩んでまいります。